

# T A O G E N

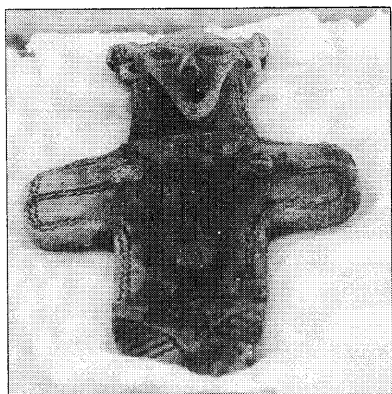
発行人◎高田かつ子 編集人◎青山富士夫 事務局◎〒211 川崎市幸区小倉1-1, I-514 下山昌孝方 TEL 044-522-4185

## 縄文の定説を覆す 三内丸山遺跡 現地報告

鎌田 武志

発掘が進む青森市三内の大縄文遺跡の実情と、面的な意義について、現地の歴史研究家鎌田氏の報告を聞く

狩猟と漁労が主で農耕を知らず、採集生活を営んでいた。また身分差がなく平等な社会であり、定期的に移動し定住していなかった。これが今まで言われ続けてきた「縄文時代」の一般的なイメージです。しかしこれを根底から覆す事実が、三内丸山遺跡から発信され始めました。マスコミの論調も最初の「巨大集落」から「縄文の大都市」へと表現が変わってきました。さ



出土した土偶 撮影・古田武彦氏

らには、縄文の定説を覆すような論も目だつてきました。定住しており、支配者がいたというように。それでもなお、固定化された縄文社会のイメージが強すぎ、三内丸山遺跡を前にしても、定説で作られた頭の中が事実を追いつかない位なのです。私たち古田先生に学ぶものにとつて、いまさら言うまでもないことと思うのです。なにはともあれ「三内丸山遺跡」は古田学説証明のための遺跡となりつつあります。以下全国の同学の皆さんのためにその概況を報告し、皆さんの遺跡見学の早急な実現を希望します。

### 1 盗掘の歴史と埋蔵量

江戸時代初期にはすでに人形の採取地として「三内村」は知られていました。永録日記元和九年（一六三三年）の条に

「又青森近在の三内村に小川有り。

この川より瀬戸物出で候。大小共に皆人形に御座候」

とあります。江戸後期の文人菅江真澄も

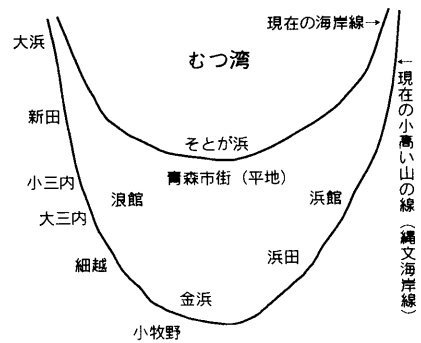
「この村の古堰の崩れより縄形布形の古き瓦あるは甕の破れたらんやうの形なせるものを、掘り得しを見き。陶作のここに住みたらんなどいへり。おもふに、人の頭、仮面などの形せしものもあり。はた頸鑑に似たる物もあり。」

と記しています。後世の学説に惑わされる事がないから、率直に専門職の存在に言及しています。別の箇所でも「むかしよりいまし世かけてほれどもほれどもつきせず」と書いています。岩木山麓にある石神遺跡では、明治年間、土偶一個が米一俵で売れたといわれます。そのために、石神遺跡は隅なく破壊され尽くしてしまいました。中央の茶人に茶道具等として高価に売られたらしい。村人の間では、さらに古くから採取されていたことで

しょう。三内丸山も、江戸時代以前から現代にいたるまで、途切れることなく盗掘され続けた遺跡なのです。私が三内に家建てたのは十五年ほど前の事です。庭に敷き詰めた石の中に、土器が混じっていました。子供らに聞いてみると、「こんなものは

いくらでもある。壊れていない完全なままの壺や皿を拾ってきた子もいる。」と言う事でした。工事現場ではシヨベルカーが大地を深く掘り起こし、土器が出てくるたびに叩き壊していました。工事が中止されることを恐れてです。その間隙をぬって、破片には目もくれず子供らが土器を拾ってくるのです。林の中には、大人が一人入れるような穴が無数にあっていました。盗掘の跡です。当時私は古田先生の著作に触れており、文献上の確認調査をしていましたが、古田史そのものにはあまり興味を持っていませんでした。いま思い起こしてみると残念このうえない、私も壺の一つでも拾ってきて家宝にするのでした……。

十年前古田先生が初めて青森に来られたおり、亀が岡や石神遺跡等を御案内しました。最後に現在の三内丸山に寄りました。その頃の三内丸山は形ばかり柵や鉄条網があつて、草がぼうぼうと繁っているばかりでした。その一端で、先生にシヨベルを持ってもらい、実際に掘ってもらいました。地表から数センチで土器のかけらが出て来ました。その時、古田先生が自分の掘り出した土器片を撮影している姿を、私が撮影した写真があります。「盗掘？」の現場証拠写真



真です。どこを掘っても破片くらいは出ましたし、盗掘者はそんなものには目もくれませんでしたから、いくらでも掘り出せたのです。

二年前、この地に野球場とサッカー場を造ることが決定し、そのための緊急発掘がはじまりました。ようやく学問の手が入ることになり、以後今夏までに出土した遺物は、10キロ入り段ボール箱で3万箱を超えているものと思われています。あまりに多すぎて、誰も数えることができないのです。青森県の考古学会の会長市川金丸氏は、その量を土器に換算すれば20万個を超えるであろうと推定しています。それも野球場予定地の半分、遺跡全体では何十分の一かの発掘現場から出たものだけの計算です。

四百年以上に渡る盗掘がなければいったいどれほどの量だったのか、今となっては誰にも解りません。住居跡やその他の出土物を見るまでもなく、このこと自体、千年以上に渡り数千人から一万を超える縄文人が、この地に定住していたと言えるのではないのでしょうか。

## 2 規模と歴史

野球場建設予定地約6万平方メートルのうち、今年七月までに発掘したのは、その半分3万平方メートルです。サッカースタジアム予定地、周辺の都市化のための道路、すでに建設されている体育館や陸上競技場など、また自衛隊敷地をすっぽり包みこんで三内遺跡があります。さらにその周辺にも遺跡の群れが広がっており、その全容は計り知れないほどの大きさです。三内の南北に延びていたであろう当時の海岸沿いに集落があり、人々の活動があつたと思われ、南6キロの地点には、小牧野遺跡と言われているストーンサークルが見つかっています。縄文後期前半の直径30〜40メートルのようですが、壊されていない、完成されたストーンサークルとしての価値は絶大です。そして今では内陸となつてしまつた山沿いに、

これからも縄文人の痕跡が発見され続ける事でしょう。縄文前期から現代にいたるまで、時に盛衰があつたとしても、連綿とこの地に入々が住み続けてきたと思われれます。

ひよつとして「サンナイ」と言う名も「サンナイ国」に住んでいた縄文人の命名かも知れません。なぜなら、今ではすっかり海と縁がないこれら遺跡に沿って「浪館、金浜、石江、浜田」等と言つた名が残っています。これらの名前の群れは、かつて海岸沿いであつた頃の命名と考えるほうが自然であると思います。とするならばその時住みついていた人々の「国」または「都市」の名もあつたはずですが、菅江真澄も「すみかのやま」のなかに三内は昔「寒苗(さむなへ)」と言つていたと書いています。(さむなへ)が縄文以来の呼び方だったのでしようか。また昔の海岸沿いと思われる場所、大浜、新田村、小三内、大三内、まむか坂、等を挙げて、

「浪館といふ村に出ず。遠き昔はこのあたりまでも潮のみちくるといふ。」

と書いています。村人が昔から言い伝えてきた事柄を書き留めた、と言つた筆致です。(図参照)

現在より気温が2度以上高く、縄文海進により5、6メートル海水面

が上昇していたので、現在の青森市街は海の底であり、現在の山沿いが当時の海岸であり、縄文人が住んでいた所です。もはや「縄文都市」を超えて「縄文国家」と言ったほうが自然であろうと思います。

### 3 出土物

#### A、大型堀立柱建物跡

直径180センチの柱穴六個のうちから、直径80センチの木柱二個が見つかりました。まだ掘り出されていない穴もあるので、これからも発見される可能性が大きいと言つて可い。立て直した跡がないこと、柱間の長さがすべて4・2メートルとなっていること等から、六階建てのビルに相当する20メートル以上の建築物であろうと推定されています。建築物として否定的な見解を示す学者もいますが、巨木を切り倒し、運搬し、直立させて埋め、なんらかの目的を達成させたところの、技術力、統率力、目的意識などを考えるならば、かなり高い文化水準を想定せざるを得ないのではないのでしょうか。

#### B、大型住居跡

長軸10×30メートルの大型住居跡十軒が検出されています。共同作業所、共同住宅等と言つて可い。しかし、「共同」と

いうあいまいなイメージではなく、支配者の下での「工場跡、仕事場、集会場」という認識も必要でしょう。

#### C、技術力

ヒスイ、コハクの

原石があつたということは、三内これらの製造加工の工場があつたことを意味します。少し前までは、三内人がはるばる糸魚川まで採りに出かけたといった報道が目だつていました。最近では糸魚川から三内に持ち込まれたという書き方も目につくようになりまし。双方の行き来があつたにしても、文化の中心点をどこに置つかによつて見方が違つてくるでしょう。各地方から持ち込まれた宝石と交換されたのが、漆細工かもしれない。津軽の馬鹿塗りとして知られている、現在でもなお難しい技術力を必要とする塗りなのです。そしてこれらの製品の誕生には、必ず多くの専門職人を必要とし、何らかの目的に応じてそれを指令する人、つまり支配者の存在があるはず。す。

#### D、盛土遺構

千年以上に渡つて土を盛り、造成工事を続けた跡。

寺野東遺跡より千年古く、高さも3メートルあり、整然としているため土器の編年をより精度の高いものにする遺跡として専門家に注視されています。

#### E、骨角器

泥炭層出土のため、

貝塚からのものよりもはるかによい保存状態でした。量も比較にならないくらい多いため、三内丸山の出土品だけで、一つの学問の分野が形成されるだろうと報じられています。

#### F、その他

土偶、骨細工、漁具、土製品、岩偶、木製品、漆、生活用品等。あらゆるものが大量に見つかつています。また、謎の石製品なども見つかつており、新しい学問の分野が開拓されるのではないのでしょうか。

以上のことは、人々の密集を意味し、高度な技術を要する分業、それを統率管理するための身分階級の存在、幅広い交通交易をも示唆し、いままでの縄文のイメージを一新させてしまふものばかりです。

当地の冬は厚い雪に覆われるので遺跡保存のために覆土しなければなりません。その工事が十月に入るとすぐ始まります。そうなりますと遺跡は再び土の下となります。その前に全国の皆さん、ぜひ見学しておいてください。

(註)見学については、九月一日付『号間通信』でお知らせしました(編集委) (筆者 本会会員・市民古代史の会 主宰・青森市三内在住)

## 静岡古代史研究会発足 記念講演会に参加して

静岡に多元の会の兄弟としての「古代史研究会」ができて、九月十一日、静岡商工会館の会議室で古田武彦氏の講演会が行われた。主宰者には我が会の会員でもある静岡の上城氏・浜松の豊田氏もおられる。

四十数名の出席を得て、上城氏挨拶の後、古田氏の講演「火山と黒潮の古代史……『東日流外三郡誌』の新時代の始まりをめぐる」が始まった。「日本国の定義は(二つの黒潮に挟まれた火山列島である」といえます」とはじまり、「邪馬台国」はなかった。以来の懸案であった縄文人の海洋渡航という命題がミイラの腹中の「鉤虫」によって証明された。いささつ、出雲国風土記の国引き神話が、シベリア出土の黒曜石原産地調査によつてリアルなものとして証明されたこと、「後漢書」の倭国(極南界也)の新しい解釈、さらに、「東日流外三郡誌」の背景としての「津軽海峡文化圏」と「東洋の交流」にもおられた。

発足の会としては上々で、今後の発展もさぞかしと頼もしく感ぜられた。

質疑応答の後五時終了、席を改めて懇親会が行われ、自己紹介の上和やかな歓談が持たれた。(安藤哲明)

「古田さんはすでに、三内丸山遺跡を発掘していたんですよ。」

いつもの、鎌田さんらしい、暖かいユーモアをふくんだ口調が、電話口の向うから聞こえてきた。

「えっ？」  
と驚くわたしへの解説。

「うちの子供が縄文土器をよく見つけてくる、ということ、古田さんを裏にご案内したでしょう。あれが、丸山遺跡のところです。古田さんが手で土を掘ったら、早速土器のかけらが出てきましたね。あそこですよ。」

知らなかった。土地鑑の無さは、どうしようもない。けれども、知らず、だったのである。当時、小学生だった、末の子供さんも、もう東北大学生。わたしの後輩となつた。歳月の流れるのは、速いものである。

その鎌田さんからどっさりと送りとどけられた宅急便。それが市浦村史版の「東日流外三郡誌」四冊だった。

その三郡誌（北方新社版・八幡書店版）の中に、今回の三内丸山遺跡の目玉、二十メートル前後の巨大木造建築物を「示唆」する記事がふくまれている。これは

は、鎌田さん御自身が「思いもよらぬ」ことだったであろう。しかし、事実だった。

「彼の故土に於て、幾百万なる津保化族栄ひ（一へ）か、古田）、雲を抜ける如き石神殿を造りき（二し）かあり。」

先住民、阿蘇辺族の住む東北に、東から「侵領」してきた、という津保化族に関する描写である。

はじめ、「石の神殿」かと思つた。しかし「石神の殿」とも、とれる。こ

造でも、石造でもいいのである。

このさい、重要なのは、「雲抜ける如き」という形容詞だ。これは、たとえばピラミッドの場合、「雲を背にして」といった表現となろう。ところが、相撲の櫓太鼓のような建造物の場合、その下から仰ぎ見れば、まさに

「雲抜ける如き」で、ピッタリだ。

今回の二十メートル前後の木造建築物、それに当る描写がここにすでに現れていたのであつた。（引用は、「東日流外三郡誌」第一・五巻。北方新社

## HISTORIAE

# 学問の醍醐味 古田武彦

の方が妥当であろう。なぜなら、東日流外三郡誌の中には、

「東日流に多く崇拜されし神は、古来の習に基づけるものに石神崇拜ぞ最も多し。」

「荒吐神は石にその精こもれるとし、石に神なる形なしたるを神のさずかりものとして大事とせり。」

「祭神は男神、女神の混精（マグワイ）石神にして、

といった表現が頻出するからだ。従つて石神の「殿」そのものは、木

版。）

未刊の和田家文書に「北斗抄」がある。その第三巻に次の文面がある。

「古き世に外濱なる大濱山内の郷ありて津母化族の集落あり。山海の幸に安住たり」

他にも、是川や石塔山や石神、大森、平架など、「古代なる人住の跡」の伝承を記録している。（「山内」に

「三内」の注記。）

近來、「流行」しているかに見え

る「和田家文書、偽作説」も、その根は浅く、もろい。それをひたすら「信奉」してきた人には、右のような対応は意外かもしれないが、その実、当り前のことだ。なぜなら、「寛政原本」をはじめ、和田家文書は、いまだその全貌を江湖にあらわし尽くしていないからである。それなのに、何の他意あつてか、「偽作」の断定を急ぎすぎるからである。諺にも「せいては、こををし損じる。」と。

ともあれ、すでに公刊本の中にも、数々の貴重な記録伝承が存在する。右の「雲抜ける如き石神殿」の一句もその一つだ。

二十一世紀に向けて、ゆつくりと、着実に、この文書群の本質と全貌を確かめてゆこうではないか。それが本當の学問の醍醐味であろう。

### 古田武彦著 新刊案内

■「古代通史」原書房刊 1800円

10月7日発売予定。お茶の水図書館における6回の講義録に基づいて構成。旧石器時代から8世紀まで、日本列島の人間の歴史を、新しい古代学の視点から、わかりやすく説く。

### 古田武彦・渋谷雅男共著

■「日本書紀を批判する」

新泉社刊 1545円発売中。記紀編纂の真相に迫る両氏の論文と、対談により構成。渋谷氏は本会員。

# 菊池の「姑蘇」

平野 雅曠

「呉王夫差より出づる也」と「新撰姓氏録」に記される「松野連(倭王)系図」について、その信憑性の決定的な裏付けとして、中国は春秋時代の呉国の都であり、夫差王の宮殿名でもあった「姑蘇」が、肥後菊池郡山門郷内に、地名として存在していたことを、私は「市民の古代研究」(93年8月第58号)に書いた。

その史料として伊藤常足の「太宰管内志」に出ている南禅寺の学僧桂菴の著「鳥隠集」の一部を掲げたが、このたび千葉市の会員、佐野郁夫氏の御好意で、同著の「姑蘇」に関する部分のコピーを手にしたので、以下補足として記してみたい。

室町時代、肥後守護の要職にあった菊池氏第二十一代重朝は、専ら文の道を嗜み、文明八年五月(一四七六)、熊本に藤崎八幡宮に於て一千句の連歌を詠じ、詩を賦して宮に納め、また十三年八月には、菊池隈府に於て、一日一万句の連歌の集いを催し、文人国守として知られている。

彼はまた領民の教化にも意を用い、聖賢の教えを学ぶ「孔子堂」を建て、

文明九年二月九日、初めての孔子祭り「秋奠」の儀式を行った。その折、隈府滞在中の南禅寺の桂菴禪師は、席に侍つて秋奠の詩を献じたが、この事は「肥後国史」にも記されている。

桂菴が応仁元年(一四六七)四十一才の時、明国に渡つて、研鑽を深めて帰朝したが、折からの戦乱を避けて豊・筑・肥の三州に転住し、更に薩州に去つたことは、以前にも記した通りである。

肥後へ来たのは菊池重朝の招きに応じたものと思われるが、菊池氏の城下町隈府の中の「姑蘇」に彼の寓居が在り、数年を過ごしたようである。

「鳥隠集」には、「姑蘇」の地名が数ヶ所に出ているが、いずれも風光麗しく、静寂で、よほど彼の氣にいった処らしく記されている。ただ漢文体の他に、登場人物や地名なども、関係のない私として、判断に苦しむ部分があるのは遺憾である。例一二を掲げる。

● 行を送る

江亭の秋色白鷗の前。  
掃客詩を吟じ小船に棹す。  
南国寧ぞ 千里の友無けんや。

姑蘇臺上月明の天。

● 飛簾之便に付す

一とたび長門を出でて幾年を経たる。  
姑蘇の寓地 白雲の辺り。  
歌詩共に 人を驚かすの句有り。  
吟断す 春花秋月の天。

● 文明丙午の秋(十八年)、貞上人肥陽より来る。……特に姑蘇の風景、詩情黙す可からず。……

『和名抄』には菊池郡に九郷が在ったとされ、その中の八郷は現地名との発音の相似によつて推定されているが、残る「山門」郷のみは確定できず、単に「迫間川流域」とだけに止まっている。しかし地図上にこれを突詰めれば、菊池市の中心、隈府町に到達するほどはない。中世、菊池氏の居城の地である。

この隈府町西部に「神来」という変わった地名があり、「オトド」と呼ばれる。古語辞典によれば「貴人の邸宅」の意である。この地域の伝承によると、昔々、ある身分の尊い人が、迫間川をさか上つて当地に來り、家を建てて住み着いた、というのである。

呉王夫差の公子、忌が「火の国山門」に住んだと記す「松野連系図」と照合して見ると、何やら係りの有りそうな伝承ではあるまいか。時は縄文晩期の頃、肥後の田舎に、嘗て見慣れぬ高床式の大殿が出現したとしたら、穴

住いの住民たちには眼を見張る驚きだったのではあるまいか。公子側近たちは、この館を「オトド」(大殿の意か)と称し、周囲の人々もこれに和して「神来」と書いても地名は「オトド」で通してきたものであろうか。

風光すぐれた菊池の「姑蘇」も、近傍に古代遺跡も多いことから、どうやらこの辺りに推定できさうに思われる。結びに、盛唐の詩人李白が、嘗て呉国の古都を訪れ、春秋時代の昔を思ふで作つた一篇の詩「蘇臺覽古」を掲げよう。

舊苑荒臺 楊柳新たり  
菱歌清唱 春に勝えず

唯今惟だ 西江の月のみ有り  
曾て照す 呉王宮裏の人

註、菱歌(菱採り舟から聞える歌)

(筆者、熊本市在住、古代史家)



「古田彦彦氏主宰 共同研究会報告」

第16回7月22日発表は、「孝徳紀の矛盾」平田博義「続古事記多元説」西江雄児古田氏より「秋田孝季日枝神社宝剣額と東日流外三郡誌」「三内遺跡建造物と石神殿」「佐久市下茂内遺跡の土製品と土器誕生形成期の提唱」などの講話があり、結びに和田家文書偽作論者には、フエアな方法により、学問のルールに従うべきことを強く求められた。次回は9月30日。

中小路駿逸氏講演

# 「新しい古代学の展開」より

演旨  
講要

国文学者中小路駿逸氏の講演会は、八月二十一日、文京区民センターで、本会の主催で行われた。詳細な講演録が、本会より発行される予定であるが、ここにその要旨を報告する。

## 古代の問題は現代に通ず

学とは、何事かをする手順でやることであり、古代とは、中世以前を言う。しかし古代と中世の境目は、地域、文化によって異なる。ある一つの地域、ある文化に限定してもそれは一線では区切れないし、そこで終るわけではない。土地を掘り下げても、人間の心を掘り下げても、どこかで古代にぶつかる。ゆえに古代の問題は現代の問題でもある。

聖書や仏典は現代人の心を支配しており、「記・紀」は現代の日本人と無関係ではない。それらが出来た時代、世界の文化全体で古代といわれる時代が研究の対象である。

学問とは真実を知る営みである。学問の方法とは、事実を正確に捉えること、観察から始まる。そこに何が、そこに何がなく、そこに何が明らかになることである。その場合、事実を見えなくす

るものがある。一つは、錯覚であり権威である。なまじ知識があると、こうであるはずと思ひ込む。思ひ込みを洗い直し、権威よりも事実を重視し、誤った認識を、理によって排除するのが学問である。その結果認識は事実に向かつて改まる。改めることが学問の大きな働きである。

太陽や月、星の動きは昔から観察され、大地は動かず、日月星辰が動いていると考えられてきた。しかしコペルニクスが、みかけ上はそうであるが、事実は大地が動いていると言った。動きの現象は変わらないが、その意味が変わったのである。

## 研究上の現在の意味

今、日本古代史に関して起こりつつあることは、天動説の世界に、地動説が入り込んだという状態である。

日本古代史には多くの謎があるという。それらはある一つの通念に収斂する。七世紀以前より近畿を中心権力がすでに存在したと。しかしその枠組は資料上からは出てこない。従来の枠組（近畿天皇二元史観）は証明されたものではなかった、と古田氏は提言された。

同じことがコペルニクスによって言われている。「多くの人にとって、大地が動くなどということは考えられてはこなかった。しかしよく考えてみれば、これは証明されたわけではなく、動くと考えてすこしもおかしくないもののように見える。」

ヘーゲルは言う。「権威と事実とが相反する事態にぶつかり、過去において権威が事実の前に崩壊した例をいくらか言っても、いつも権威が間違っているとは限らない、今度は権威が正しいと人々は言う。」（『歴史哲学講義』岩波文庫）

日本と中国の文字を研究するなかで、日本列島のイメージを求めると、七世紀前半以後、従来の日本古代史の枠組と合わない現象にぶつかった。奈良の都は唐代になって初めて中国の公的認識になったと唐詩は言う。これは従来の通念には合わない。しかし古田説には合う。それでは通念の根拠はどこにあるか、「記・紀」にあるのか。

## 日本古代史の枠組の「変化」

『日本書紀』神武紀は、王の子孫である神武が、初めて橿原宮で帝位に即位し、天基を草創したと言う。これは九州で王位に即位することになった傍流の王の子孫が、近畿で初めて王位に即位したということであり、その権威が連綿と続く九州の王権によって保証されて

いることを述べている。これは従来の通念とは異なる。これを津田左右吉以下、遷都と誤解した。王朝は近畿以外になしという枠組に捕われていたからである。どこで間違えたのか。

『続日本紀』宣命は、天孫降臨より文武天皇に至るまで一系であると言う。しかしこれは『日本書紀』の主張とは矛盾する。



「書紀」は天孫降臨—A—A'—B'の系譜であり、宣命は天孫降臨—文武だとする。歴史事実としては「書紀」であり、歴史の意味づけとしては宣命であり、歴史の意図は九州の王権の歴史を消している。大元元年の「始めて」の記事の続出はそれを物語っている。『続日本紀』は、持統・文武の間に大きな変化があったことをさりげなく記している。従来の通念は「記・紀」から宣命からも、誤解あるいは曲解による以外出てこない。

また『日本書紀』の書の字は、複数の王朝のなかの一王朝のみについて書かれた史書の証明である。八世紀の朝廷はそう証言している。このことを崩す通念は古来証明されていない。

以下、聖書・倭人伝・仏典・道教书等からのユニークな論攻は、講演録をお待ち下さい。（富水長三・記）

# 山田宗睦 日本書紀講座 第四回

報 告

## 初夜神話が国生み神話に拡大

いよいよ国生み神話である。まずイザナキ、イザナミはこの神か。大和ではない。矛を持つ神なのに、大和から矛は出土せず、筑紫・出雲・志岐・対馬からしか出土しないからである。その出身地は特定できる。「橘小門に還向」とあるからで、イザナキ、イザナミは博多湾岸の人である。この二人の神が大八洲国を創生して行く。

洲を「しま」でなく「く」と読むことで視界が開けてくるようである。洲を除くと①豊秋津②二名③筑紫④億岐⑤佐度⑥越⑦大⑧吉備子、となる。トップに挙げられた淡路が除かれていること、億岐と佐度が双子とされていること、などが大きな疑問になる。書紀は大和中心の話にするために、盗んでくるとかデッチあげるとか、やっておきながらその証拠を残しているという変な書物である。第一子である淡路を早く思わないとあるが、日本神話では第一子を嫌うというパターンが多い。これは何故なのか、納得できる説明に接したことがない。

大八洲国の各々は点に近く、狭い地

域が多いことも要注意である。筑紫は博多湾岸近辺の狭い範囲と考えざるべきである。越を現在の越前・越中・越後を含む地域とみると大き過ぎる。また大(洲)も大国に出来るとすると広過ぎ、古田説には従わない。

国生み神話について、紀と記の違いは小さくない。両者の関係については紀が記より先行しているとする梅沢伊勢三説を支持するものである。古田説では記によって、亦名のつく神が天・大・建の頭文字を持つことから、天國の領域が定められた。これはみことな説だが、考古学の証拠が弱い上、紀の視点からはいえない。

イザナキ、イザナミの話は元来、他愛もない初夜神話であったが、それが紀の作者によって壮大な国家の起源の話に拡大された。このコア部分を考えることが重要である。

以上本文七行分の説明に過ぎないが、これだけ豊富な内容が盛り込まれているのである。自分で読んでみるだけでは全く思いもつかなかった問題がみえてきた時の驚きと喜び。久しぶりに講義というものを満喫している。木村由紀雄・記

●第五回(会場 日いち変更)注意

●10月16日(日)午後1時半〜東京都勤労福祉会館 6F(地下鉄日比谷線・八丁堀下車)

●第六回11月13日(日)午後1時半〜文京区民センター 4B室 ●連絡先 西江雄児

☎048(622)73263

『たろんサロン』は、会員の皆様に自由に会話を交していただく欄です。大小にかかわらず遠慮なく御投稿ください。



## 四つの多胡碑

安中市 高沢 均

上州三碑の一つの多胡碑についての話題です。国指定の多胡碑のほかに、三つの多胡碑が存在します。その一つは、同じ多胡郡吉井町の仁叟寺にあり、刻まれた碑文は、国指定の碑と「寸分たがわず」、ただし笠石はありません。近在の檀家の屋敷内に保存されていたものを、昭和十五年にこの寺に移転され、後に覆堂が建立されました。

さらに隣、富岡市の個人宅の蔵にも非公開の碑が一体あります。以上二体の碑を、三十年ほど前に、仁叟寺の住職さんらが、拓本をとって国指定の碑と見比べた限りでは、仁叟寺のものは判別不能なほど酷似し、富岡のものは、文字に微妙な違いが認められました。模刻説が強いながらも、その正体は諸説紛々というところです。もう一つは、福島県にあり、「群馬県は気の毒に、偽物を大事にしている……」と言われているそうです。

それぞれの碑の根拠は、いずれも謎めいているものの、よく調査してみれば、羊太夫の秘密を解くのに、何らかのヒントが得られるのではないかと、期待しているらしいです。

向山遺跡  
朝霞市で現地説明会

晴天続きの八月二十七日午前十時、埼玉県朝霞市の「向山遺跡」の現地説明会に参加した。畑作農地の区画整理事業に先立つ発掘調査で、94年四月から始まり96年までの二年間の予定。調査対象面積は四万五千方メートルで、毎日八十人が発掘調査に当たっている。

武蔵野台地が荒川へ落ち込む産の上の畑で、下には湧き水の小川が小さい谷を流れている。北側の急坂は、最近までは雑木林で力タクリの群落が早春に一斉に咲いていたところ、今は大きなマンションが建っている。

遺跡は現在までのところ、遺構、出土物から、旧石器時代から奈良・平安時代まで連続する複合遺跡で、一万二千年前までさかのぼるとしており、すでに発掘した住居跡は二十数戸を数える。

出土した主な遺構と遺物は、旧石器時代層からナイフ型石器、フレイク、スクレーパー、石核各一。縄文石器、打製石器、弥生時代住居跡、方形周溝墓、弥生土器、銅剣、丸玉。古墳時代住居跡、方形周溝墓、円形周溝墓、土師器、須恵器、勾玉、管玉、白玉、滑石製模造品などを含む。

出土物の詳しい調査、土器類の修復、編年などは発掘におわっているため、当分の間は手がつかない模様。当日の説明会は大盛況で三十七名が四十名ずつ、八班に分かれて順次に見学した。発掘は始まったばかりで、今後の調査が期待される。(朝霞市 長井敏二)

田田市出土

## 見る 金銀錯象嵌鉄鏡

八月十四日 富永長三氏らと国立東京博物館で、田田市出土で伝えられている「金銀錯象嵌珠竜紋鏡」を見た。

驚いた事はこの鏡が我々のイメージにある古代鏡に全く似つかない姿をしていたことであった。表面の鉄の部分はすっかり錆びて、補修のためにプラスチックでモールドされているが、裏面の象嵌部分も全く同じ印象で、プラスチックとの境界がわからない。仕上は漆だろうが、その上に薄く細かい金銀の板を植え込んで珠竜紋と四つ文字(長官口孫が表されていた。文字も繊細なもので、殊に「孫」と「官」の下部の曲線は、日本画用の「面相筆」と呼ばれる、細い筆で書いたような微妙な線で、普通の銅鏡の銘文の字体とは大きな懸隔がある。少し離れた所にこの鏡と併せて出たという金銀象嵌の帯鉤が展示されていた。もしこれを同じエリアに展示されたらその印象はもっと強烈であったろう。展示方法の点では、同じ室に展示されていた船山古墳出土の銀象嵌太刀と、離れて展示された、それに伴出した金銅の冠や沓にも同じ事が言える。これが纏まって展示されていたら、これに匹敵する同時代の出土品が近畿地方では見られない事が一目瞭然理解できるのである。

「」の展示はむしろ解らせない事が目的ではないか」ところのが我々の印象であった。(安藤哲朗)

▼「騎馬民族の遺品」展 10月11日～12月3日

## 見る 人頭形土製品が出土

成田市の縄文前期遺跡

八月二十五日の新聞は、成田市の縄文時代前期遺跡から人の頭の形をした土製品が出土したことを伝えた。このような人頭形の土製品はこれまで例がなかった。佐倉市の印旛都市文化財センターで短期間公開されることになり、八月二十七日、古田先生、高田会長、富永さんとともに会場を訪れた。

人頭形土製品は墓穴から発見されたもので、土面ではなく後頭部まで作られている。デスマスクという見方が有力だが、その表情のリアルなこと。縄文前期の土偶とはあまりにも異なっているため、前期遺跡からの出土という事実をどう考えるか、今後の研究が待たれる。

「巨甕は一見に如かず」を身をもって体験した。(木村由紀雄)

## 読む 「人頭」の運命

古田武彦・著 原書房刊

出版社に寄せられた愛読者カードより)

◇東京都荒川区 宮下卓朗  
梅原氏「水底の歌」を読んだ時は、文献上の証拠がないとして無視する国文学者に不信感を持ったものだったが、本書を読んだとその慎重な態度に納得するものがある。(中略)「朝田」という姓について想像を新たにさせてもらった。琉球王朝の古文書などの中

## 定例会のご案内

1月例 発表と会員懇談の会(例会)

11月6日(日)

▶話題提供者▶ 渋谷雅男氏。新著「日本書紀を批判する」をめぐって。その他。

2万葉と漢文を読む会

10月23日(日) 11月27日(日)

漢文では、いよいよ謎の梁書倭伝に取り組みます。

12月とも、会場は文京区民センター 午後1時～5時 会場費300円

いずれも発言自由 飛び入り発表も歓迎です。気軽にお出かけください。

## 事務局便り

●十月九、十日の「古田先生と行く信州縄文の旅」は満席のお申し込みをいただき盛大に挙行の予定。●年度途中ですが、新規ご入会を歓迎しています。詳しくは事務局までお問合わせ下さい。

◇大阪府枚方市 K.S.S.Y  
に新資料が見つからないものかと思つた。

「女性の直感」といつ表現が何度もあり、やはりこの著者も男性性の偏見があるような印象を受けました。(中略)近畿天皇家一元史観については、もっとこのように、批判が行われるべき。興味深く読みました。

◇八王子市 寺坂園之

定・通説を金科玉条にしておられる大先生方に、古田史学に対する反論を出させるべきです。学問の進歩のために出版界に希望します。

## 伝言板

吾妻姫を探索する同志を募集!

古田先生は、日本武尊の「吾妻はや」は北関東にあった伝承から盗んできたものではないか、と述べておられます。北関東に吾妻姫の古代王国の在りや無しや、追跡の会を結成したいと思えます。仲間を募っています。左記までご連絡ください。

〒207 東京都大和市芋窪1-2-147-8 八谷 進 ☎0425(67)4715



充実した会報をお届けすることが、会員の熱意にお応えする最大の方途と心得ています。

◆本号では、三内遺跡について、北方の会員鎌田武志さんの、他の新聞雑誌では見られない、臨場感と郷土愛に溢れる報告をいたしたく、幸せに思われました。◆今後ともこのように活発な会員の研究活動を紙面に反映させることによって、楽しく読めて勉強できる会報にしたいと考えています。◆ご意見、ご質問、ご連絡のために「伝言板」を設けました。ご利用下さい。(魁)

## ●当会への「連絡」は

会長▶高田かつ子 ☎044(881)9111

〒366 浦和市南浦和3-19-2-203

事務局▶下山昌孝 ☎044(522)4185

〒211 崎市幸区小倉1-1-1-514

編集室▶青山富士夫 ☎03(377)7809

〒151 渋谷区本町1-7-16-132